（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　猪熊　恵子

猪熊恵子氏の『Between Voice and Text: Techniques of Narration in Charles Dickens's Early and Mid-Period Novels, 1836-50 (声と文字の交錯――ディケンズ前期中期小説(1836-50）に見られる語りの手法)』は、英国の作家チャールズ・ディケンズの作品における音声言語と文字言語の関係に焦点をあて、作家の伝記的事実や当時の出版事情などにも考察をひろげながら、その語りのメカニズムを説き明かした論考である。

従来のディケンズ研究では、初期作品の話し言葉らしさや語り聞かせ調に即興性ゆえの散漫な言葉遣いを認め、中期から後期にかけての作品にそうした傾向の克服を見て、後者こそが優れた人間観察や高い洞察力を発揮していると考えることが多かった。こうした作家観の背景には、文字言語を音声言語より一段上のものとみなす近代特有のテクスト信仰があることはすでにさまざまな領域で議論されているが、猪熊氏はそうした議論を踏まえた上で、晩年まで自作の朗読会に精力を注いだディケンズにおいて声とテクストの関係がそれほど単純なものではなく、さまざまな興味深い裂け目や逸脱があることを丁寧な作品読解を通して明らかにする。

三部構成をとる本論文の第一部では『ピックウィック・ペイパーズ』『骨董屋』といった作品がとりあげられる。当時、印刷術の発達と交通機関の充実を通して作品の流通形態が大きく変容する中で、文字言語の覇権が徐々に強まっていたとも考えられるが、そんな中でディケンズが従来の音声言語の意義を再認識しむしろ音声言語の流域を死守しようとした様が、作品の語りの構造の分析を通して明らかにされる。第二部では『アメリカ紀行』や『マーティン・チャズルウィット』といった作品をとりあげ、ディケンズの著作権問題に対する姿勢から出発して読者論へと議論の枠を広げる。猪熊氏によれば、ディケンズの著作権へのこだわりの底流にあるのは、書き手と読み手のテクストをめぐる所有権争いでもある。巨大な読者マーケットが形成され作品の「商品化」が進行した 19 世紀の英国で、そのマーケットの主役の一人であった流行作家ディケンズが、自作の商品化にアンビバレントな感情を持つようになったというのである。第三部は中期の代表作『デイヴィッド・コッパフィールド』などをとりあげ、自伝性の高い作品で登場人物の声、生身のディケンズの声、そして作家としてのディケンズの声の間にどんな拮抗が生じているかを分析する。

音声言語と文字言語の関係はさまざまの議論がなされており、考察の余地は多分に残されているが、それは歴史的・伝記的文脈を明らかにしながら、ディケンズの前期中期作品にたいする新鮮な読解を提示した本論文の価値をいささかも損なうものではなく博士(文学)の学位を授与するにふさわしいと考える。